老 莊 思 想

陰陽思想講座

はじめに

当講座では陰陽思想について私たちの生活や経営において発生する様々な疑問に対する見方、捉え方を学んで参りました。

なぜ、今の世の中に陰陽思想が必要とされるのか？それは当時の時代背景と今の世の中の動向が似ているように思えるからです。

令和に入り、突然起こったコロナパンデミックから 6 年が経過、ようやく平静を取り戻したかに見えても、実際はますます混乱し、将来が見通せない暗い時代に突入しているように思えてなりません。

コロナは終息したのではなく、今までは序章に過ぎず、これからが本番を迎えると思っているのは私だけでしょうか？

国際的には、ウクライナとロシアの戦争を始めとして世界中で戦争の火種は燻り続けています。

戦争にならなくても世界の構図は大きく変わる時を迎えているようです。

国内に目を向けても様々な矛盾を抱えています。

・食料危機が深刻となっています。
　物価の高騰と国民一人一人の収入のバランスが取れません。

・日本には、世界中で最もおいしいと言われるお米があるにも拘わらず、品不足となり、価格が高騰しています。
　この前までは余って困っている時代が続いていたことを忘れてしまったようです。

・酪農も無くなる方向に持っていかれています。
　過日、酪農組合の再建に携わった時、「牛乳は水より安い」と嘆かれていました。

・生活が苦しくなった時、政府が真っ先にやらなければならないことは、税金を減らすことです。消費税を撤廃すれば、それだけで生活は楽になります。収入が 10％増えたと同じことだからです。
そのことで国民一人一人に活力が生まれ、景気は復活します。なぜ頑強に拒むのでしょうか？なぜ政治家は国民の代表者という認識を持たないのでしょうか？

その他、挙げればキリがありません。

このような世の中にあって、私たちはどのような考え方を持つべきか？

それが「世の中の全ては陰陽両面で成り立っている」と説く陰陽思想であり、それをより具体的に私たちの生活に取り入れてくれるのが、老荘思想です。

この混乱する世の中を生き抜く知恵として学びましょう。

令和７年２月７日

古川益一

1　３つの教え

中国には３つの教えがあります。

仏教、儒教、道教です。この中の仏教は馴染みがありますが、儒教は良い教え？くらいでしかないと思います。しかし、儒教の国と言われる韓国、中国の国民性を見るとしっくり来ない人もいるかと思います。

さらに道教ともなると、もっと遠くになると思います。いずれも2，500年前から広まりました。

まず、この３つの教えの違いから考えてみましょう。

・仏教

インドの釈迦により広まりました。

人生は苦であることが出発点となっており、いかにして極楽浄土へ行くことが出来るかとの教えです。インドから中国へ渡り、日本へは ６ 世紀頃伝来、聖徳太子により、取り入れられました。

・儒教

中国の孔子、孟子により、広まりました。

仁、義、礼、智、信などを説き、社会のエリートの心得を説きました。

儒教は「人間関係を円滑にするための人格形成」を説きましたが、表面的な道徳であり、建前であったようです。

四書五経［四書（論語、大学、中庸、孟子）、五経（易経、書経、詩経、礼記、春秋）］を備え、日本へは仏教の伝来と同じ頃、論語（孔子）が伝来、朱子学、陽明学として発展していきました。

しかし、韓国、中国では違った解釈をされているように思えます。

・道教

儒教はエリートの教えとしての表側の道徳であり、どうしても生きていく上で息苦しくなります。そこで、「人生をいかに努力しても仕方ない、与えられた現実に満足しながら楽しく生きていきたい、のんびり生きたい」という願望が民衆から生まれ、その願いから生まれたのが道教と言われています。

その道教の源が老子、荘子の唱えた思想です。

この老子、荘子の思想は日本に渡り、一旦消えそうになったものの、根強く生き、徐々に広まっているようです。

本講座では、この３つのうちの道教の基本となっている老子と荘子の思想を学びます。

2　「儒教」と「道教」の違い

① 「儒教（儒家）」

儒家はその始め、周代の制度を理想とし、その「礼楽」を復興することで、戦乱の世を治めようとしたところから始まります。

道徳の基本として、「仁」（人を思いやる心）を挙げました。有名な思想家として以下が挙げられます。

- 孔子・・・・・春秋時代
- 孟子・・・・・戦国時代
- 荀子・・・・・戦国時代
- 朱子（朱熹）・・・・・宋時代
- 王陽明（王守仁）・・・・・明時代

② 「道教（道家）」

道家は儒家の唱える「礼楽」を否定し、自然に帰ることを提唱します。

「礼楽」というのは、実に煩雑で人間の本性に背いたものであり、これを捨てて自然の本来のあり方（これを「道」という）に従って生きるべきだと主張します。因みに、儒家でいう「道」とは「人間が踏み行うべき事柄」というような意味で、著しく倫理的な意味に使われており、道家とは大きく異なります。有名な思想家として以下が挙げられます。

- 老子・・・・・伝は不詳だが、おそらく春秋時代
- 荘子・・・・戦国時代

老子・荘子の考えは、後に中国の民間信仰である「道教」に取り入れられました。

「道教」は中国の民間信仰の始祖とされる黄帝という伝説上の人物を祭った宗教で、老子も太上老君として祭られています。

現在、中国に道教寺院がありますが、老子・荘子の直接の流れではなく、この民間宗教の寺院です。

3　儒教各派の特徴

孔子には弟子が多かったようですが、孔子没後、弟子の得意分野によっていくつかの流派に分かれたようです。そして時代と共に発展していきました。そのうち、特に有名なのが、次に挙げた、孟子以下です。

① 孟子

孟子は、道徳としての仁義を重んじた人でした。そしてその道徳の源泉として人間が持っている心を取り上げました。「人が持っている心をそのまま育てていけば、仁義に至る」と考えたのです。そのため彼は徳性はもともと人の心に宿るという、性善説を唱えました。

「孟母三遷の教え」で知られています。

② 荀子

荀子は、孟子と違って礼楽を重んじました。仁義が内面的なものとすれば、礼楽は外面的なもので、人間に最初から備わっているとは言い難いものです。そこで彼は礼楽の根拠として、「人間は放っておくと安逸に流れて悪いことをする」、つまり人間の性は悪であるという性悪説を唱えました。

「青は藍より出て藍より青し」で知られます。

③ 朱子

宋の時代に儒学を再興したのが朱子です。当時は、仏教や道教も盛んでしたが、それに比して儒学は世界の説明という点で見劣りしていました。そこで彼は「理」と「気」による世界観を考え出し、儒学を再構築しました。

これを「朱子学」といいます。

徳川家康は江戸幕府の基本の教えとしました。

中江藤樹、大塩平八郎、二宮尊徳、西郷隆盛、吉田松陰、高杉晋作などが知られています。

④ 王守仁（王陽明）

朱子が「理」を人間の外部にあるものとしてそこから道徳まで説明しようとしたのに対し、王陽明は「いいや、俺にはそんなものは感じられぬ」として、人の内部にあるものとしました。そして人が持っている以上、本当に良いと思えることは必ず実行に移せるはずだと考えました。

これを「知行合一説」といいます。王陽明の考えに基づくのが「陽明学」です。

これらは江戸時代の日本で盛んになり、日本人の教養として定着したようです。

4　道教の特徴

「道教」の中心的な考え方を「老荘思想」と言い、「道(タオ)」と「無為自然(むいしぜん)」を核とした思想です。

これは、「老子」とその後継者である「荘子」の考えをまとめたものです。

●老子・・・伝は不詳で実在の人物かは不明
●荘子・・・戦国時代で実在の人物

「老荘思想」では、以下の 2 点を重視します。

① この世の全てを生み出す根源である「道(タオ)」と一体化を目指す。
② 理想を追い求めずに、「道(タオ)」に任せて生きることが大切である。

「道(タオ)」に任せることは、すなわち、人為的に何かするのではなく、ありのままに生きることである。

そのように「老子」は考えました。

もっとも大事な「ありのままに生きること」を「老子」は「無為自然」という言葉に込めました。

一言で言うと、「超然として心穏やかに自由に生きること」を説いており、「人生は素晴らしい」と言う絶対境地として「が」から「も」へ「それもいいね」「あれもいいね」というものの見方、捉え方です。
世に名人、達人と言われる一流経営者の多くが老荘思想の実践者と言われます。

私は 50 年に及ぶ経営経験から、経営学の「絶対境地」というものを求め続け、陰陽思想に行き着き、そこから世の中の真理を求め、経営の世界に取り入れ、経営再建に実践して参りました。その集大成としてまとめたものが「経営の真理と実践」そして「経営再建のすゝめ方」です。

5　儒者（孔子、孟子、荀子など）と老子、荘子の違い

儒教と老荘思想は著しく考え方が異なります。さらに老子と荘子でも弱冠違います。この違いをわかりやすくするため、3人の医師に例えて説明します。（安田正篤老荘のこころより）

3 人の医者の型（A・B・C 先生）

A 先生＝儒者型

A 先生は見るからに真面目な医者である。容貌から服装から全て整った、患者に対しても礼儀正しい、口数は寡（すくな）いが、注意は行き届いて、要点をはっきりさせる、どんな患者も一度で信頼と敬意とを感じさせられる好い医者である。

B 先生＝老子型

B 老医はおっとりとして柔和な、屈託のない、よく練れた紳士である。風采も別に構わないようで、なかなか垢ぬけている。たいていの患者をいつも子供のように手軽くあしらって滅多に特別改まった態度を見た事はないが、稀に生真面目な顔をして応答しながらズバリズバリと客の意表に出るような口をきく人である。医者でありながら余り薬を呉れない、というよりもむしろ人を診たがらない、医者以上というか、以外というか何だか型に嵌（は）めきれない闊達（かったつ）なものを感じさせられる。

何、お薬？あんまり薬なんて飲むもんじゃないよ。薬は毒だよ。

営養物？そんなもんは要らんさ。一体君は牛肉だの鰻だのとあんまりうまいものを食い過ぎるから病気になるんだよ―患者は少々てれ気味である―君なんざ営養物だの薬だのというより少し干（ほ）しあげた方が好いんだ。エー君。

C 先生＝荘子型

これはまた手荒い医者である、C は。毬栗頭（いがぐり）をふりたてて、ネクタイのひんまがった、いかにも辺幅（へんぷく）を飾らぬ無造作な恰好の男である。

※辺幅＝布地のはしやへり、転じて外見、うわべ。

患者はドギマギしている。

何日ぐらいで治りましょうか。

さ！そのうち治るだろう。大したことはないよ。人間はちと病気ぐらいあった方が悪

いことせんで好いかも知れんて。アッハッハッハー。

　どこまでも口が悪い。しかし人は極(ご)く善い。無精たらしい、また実に無精者であるが、それで何かに凝り出すと馬鹿に精力を出す。不親切かと思うと、とんでもない親切なもので、病院に宿直の夜など、夜半にそっと抜足して患者の室を回ったり、熟睡しているかと思うと、むっくり起き上がって電気をつけては調べものをしたりする。もちろん患者のためにやる仕事である。

　3 人の人物の型を並べました。
果たして、コロナで翻弄される今現在の風潮を眺めた時、どのような対応をしてゆくべきか？考えてみましょう。

　次頁より、老子と荘子の説いた言葉を現代に訳し、さらに私なりに経営の「真理」へと応用してまいります。
　順不同ですが、徐々に老荘思想への理解を深めて行かれることと思います。
　たくさんの教えの中から、30 項目を選びました。

1. 道の道とすべきは常の道にあらず

老子の最初に出て来る言葉です。
天地や万物は、常に流れ動いており、永久に変わらないものは存在しない。この不思議な宇宙を創り、万物を生み出したものは何か？
これを道と言っています。
この道というものは、追求しても追求しても難しく「これが道だ」と思った瞬間にそれは道ではなくなるとまで言っています。
これを現代の科学と照らし合わせてみましょう。
老子は２つのことを言っているようです。

(1)この世に絶対不変なものはない
(2)宇宙や万物を創造したものは、もやもやとした“なにもの”かだったらしい（これを老子は“道”と規定した）。

現代の宇宙物理論によれば
① 宇宙は固定しているものではなく、たえず膨張している。
② 宇宙の開始は、火の玉状のものであったらしいが、その実体はよくわからない。
③ 宇宙は、母宇宙→子宇宙→孫宇宙・・・・と絶えず分裂と膨張を続けている。人間の住む宇宙は、その子か孫の小宇宙にすぎない。

面白いことには、この現代の学説と老子の説いた説は似かよっています。
少なくとも、〇絶対不変とか絶対に固定したものはない。
〇天地は、曖昧模糊としたつかみどころのない何ものかによってつくられた。
という２つの点において、現代の宇宙物理学と老子の考えは同じです。

世の中の出来事に絶対というものはありません。
知識、常識というものは常に変化しています。
現在の世の中も令和になり、コロナ禍により激変、戦争が起きています。そして、これからの世の中がどのように変化するのか？誰も予測出来ません。
しかし、「道」というものは万物の根源にあって、万物を万物たらしめていながら「道」自体はいささかも自己を主張することはしないし、功績を誇ることもありません。
このような「道」のあり方を体得出来れば、この厳しい世の中を流れに呑まれず流れ

に乗りながら上手に生きていくことが出来ると言っています。
私はこの「道」というものを「経営の真理」として探究しております。
経営に関する本は、ほとんどが成長と拡大を目指しています。勝ち組、負け組に分け、勝ち組になることが最も良い経営のやり方と言っています。
しかし、数字ばかりを気にして、目標達成のために走り続けることが、本当の経営と言えるでしょうか？
経営の真の目的は「経営を通じての人格形成」、つまり品性を高めることにあると思います。

2. その光を和らげ、その塵に同じうす

有名な「和光同塵」の四字句で知られています。この四字句は仏教でもいわれるようですが、もともとは『老子』が出典です。
『老子』の原文をもう少し長く引用すると、次のようになっています。

「道は沖(ちゅう)なれども、これを用うれば盈(み)たざるあり。淵(えん)として万物の宗(そう)に似たり。その鋭(えい)を挫(くじ)き、その紛(ふん)を解き、その光を和らげ、その塵に同じうす」

これは、「道」は形のない存在だが、その働きは無限であり、測り知れない深さの中に万物を生み出す力を秘めている。道はとげとげしさを消し去って、対立を避け、才知を包み込んで世俗と同調する。」と訳すことが出来そうです。
これを経営者としての在り方としたらどうなるでしょうか？
「光」は自分の持っている能力や才能です。仕事の出来る人です。
それをギラギラさせないのが「和光」です。人の出来た人です。
「同塵」は、周りのいかなる人とも同じように調和するということです。
こんな生き方が「流れに呑まれず流れに乗る生き方」に通じると思います。

3. 聖人は、無為にして、不言の教えを行なう

「聖人」とは「道」を体得した人物を指すようです。
老子のいう「道」は、『万物の根源にあって万物を支配している。それほど大きな働きをしながら、何ひとつ積極的な働きかけをしない。いわゆる「無為」であり、「不言」』である。

したがって、「道」を体得した聖人も、「無為」であり、「不言」にならざるを得ない。それを「聖人は、無為にして、不言の教えを行なう」という言葉で表し、それだからこそかえって大きな働きが約束されるのだと言っています。
では、「無為」や「不言」を、もう少し具体的に言えばどういうことになるのか。老子はさらに言葉を続けて、次のように語っています。
「万物を自然の成長に任せて、自ら手を加えない。手を貸しても見返りを期待しない。功績を立てても鼻にかけない。だから、いつまでもその地位を失わないのである」
これが聖人のありようなのだと言われます。私たちも、こんな生き方を心掛ければ、老子のいう聖人のレベルに近付くことが出来るのかもしれません。

【「無為」こそ政治の理想】

賢を上(たっと)ばざれば、民をして争わざらしむ。得難きの貨を貴(たっと)ばざれば、民をして盗を為さざらしむ。欲すべきを見(しめ)さざれば、民をして乱れざらしむ。

「為政者が賢者を重視しなければ、人民は功名を競わなくなる。高価な財貨を珍重しなければ、盗みを働かなくなる。欲望を刺激しなくなれば、乱を起こすこともない」
「無為」の政治とは、人間のさかしらやなまじっかな知恵を否定し、ぎらぎらした欲望を極力抑えれば、世の中は治まるのだということです。
こういう理想の在り方と最も遠くかけ離れているのが、現代の日本の状態なのかもしれません。
知識の習得ばかりを考えるため、人間として一番貴重なものが見失われてきているように思われてなりません。

次に無為自然をもう少し深堀りしてみましょう。

〈無為自然について〉

「無為自然」の「為」は行為などと同じ意味ですので、「わざとらしい振る舞い」を表現しています。
これが加えられていないことを表すのが「無為」ですので、「無為自然」は「宇宙のありかたにしたがって、ありのままであること」という意味であることがわかります。

また、ここでの「ありのままであること」には 2 つの意味があります。
一つは、自然に対し何も「手を加えない」という意味。
そしてもう一つは「自分らしく生きていくべき」という考えを表す意味です。

1.「無為自然」は状態を表す言葉

手が加えられない、自然のままであることを表す言葉ですから、以下の例文のように使われることがあります。

〈例文〉

あの家の庭は「無為自然」を追求するかのようだ。

※この場合は、見せつけるような造作をせずに、自然な状態でありながら、整っている状態を表現しています。

2.「無為自然」は考え方を表す言葉

飾らず自分らしく自然体で生きる人生観を意味します。
以下のような文脈で使われることがあります。

〈例文〉

技術偏重の社会に疲れ、人は「無為自然」を求めているのではないか。
彼の田舎暮らしは「無為自然」そのものだった。
※質素で自然のルールに身を任せる生活という意味合いで使われることも多いようです。

3.暮らしの中での「無為自然」

生き方としての「無為自然」は無理に何かを為そうとせず、あるがままに生きることでした。
しかし、仕事の面で何もしないことは許されません。
ビジネスの世界で、「無為自然」は、肩の力を抜いて、平常心で取り組むことを意味する言葉になっています。
そのため、日常会話の中で、以下のように使われています。

〈例文〉

張り詰めた雰囲気のコンペではあったが、「無為自然」の境地で臨んだ。
肩ひじ張らず、「無為自然」の心で取り組んでほしい。

また、自然な流れに身を任せるという部分に重きを置いて、無理をしないという意味で使われることもあります。

〈例文〉

彼は「無為自然」なスタイルで仕事を進めるね。

4.哲学としての「無為自然」

「無為自然」は東洋哲学の中でも重要な言葉の一つです。

ここでは、孔子が説いた儒教との違いを理解する必要があります。

孔子は道徳的なルールを作り、それを守ることで理想の社会を作ろうと提唱しました。

例えば、人への愛を表す「仁」や、純粋な真心を意味する「忠」などです。

これらは、人として守るべき道徳秩序を定めたのです。

これに対し、老子はそれらは作為的であるとしました。

それをわざわざ定めなくても、「道（タオ）」に従い生きれば、道徳は自然と備わってくるとしたのです。

このように対立する概念なので、哲学の世界では以下のように表現することが度々あります。

〈例文〉

老子・荘子の思想は「無為自然」を重視し、それに対する人為を否定する。

戦乱が続く、当時の世相の中で、老子は「人がありのままに生きることこそが尊い」と結論付けました。

「無為自然」はその思想の最も基本的な考え方です。

あえて何もしなくても、自然と世の中がよい状態になり、人々を幸せにする。

それが徳のある政治家であると老子は主張しました。

生き方においても「目的意識に縛られず、自然との融和の中で自由な生き方を見つけようとする考え方」です。

4. 太上（たいじょう）は下（しも）これあるを知る。その次は親しみてこれを誉（ほ）む。その次はこれを畏（おそ）る。その下はこれを侮（あな）どる。

指導者のランクを四等級に分類しています。

「最も理想的な指導者は、部下から存在することさえ意識されない。部下から敬愛される指導者は、それよりも一段劣る。これよりさらに劣るのは、部下から恐れられる指導者。最低なのは、部下からバカにされる指導者だ」と言っています。

部下からバカにされるようでは、もはや論外です。しかし、世の中には、このクラスが少なくありません。また、社長が出社すると、社内の空気がピリッと引き締まるリーダーがいます。しかし、なかなかのレベルだが、老子によれば、まだまだとしか言いよう

がないと言います。

老子は「立派な指導者は、弁解も宣伝もしない。素晴らしい業績を上げても、それがかれの働きだとは認識されない。そんなあり方がもっとも理想的だ」と、結論付けています。
これは「無為自然の経営」と言うべきものであり、経営者として到達すべき目標と思います。

5. 功遂げ身退くは、天の道なり

これも有名な言葉ですが、では、なぜ功を遂げたら身を引くのが「天の道」なのか？そのほうが功績や名誉を全うすることが出来るからのようです。
逆に、地位に恋々とすれば、どうなるか。満杯になった水がすぐにこぼれてしまうように、せっかく築きあげた地位や名誉まで失ってしまいかねない。そうならないために、昇りつめたら早めに身を引くことを教えています。
老子は、「あふれるほど注ぎ込んだ水は、すぐにこぼれる。鋭くとぎすました刃物は、折れるのもまた早い」と語っているように、極盛の中に転落のきざしを見てとる。つまりは、昇りつめた後の反動を警戒しているのです。
これは老子だけではなく、「淮南子（えなんじ）」も、「天地の道は、極まれば則ち反り（かえり）、盈（み）つれば則ち損ず」と語っているし、『易経』もまた、「亢龍（こうりゅう）、悔いあり」と、昇りつめることの危うさに警告を発しています。

頂上を極めたら退くことを考えることは、経営者にとって大切な考えです。
人生を掛けて経営者として努力し、それなりの成功を収めても人生は有限です。
必ず終日を迎える時が来ます。
元気なうちに、経営者を退き、後継者にバトンタッチする勇気が必要です。世を去ってから残した地位や、財産により家族をバラバラにしてしまう例は数え切れません。
私は会社の閉鎖を「転生」または「倒産」に導いていますが、その方法をハッピーリセットまたはハッピーリタイアと言っています。

6. 怨みに報いるに徳を以ってす

人として生きる以上、特に会社を経営する以上、必ず周りとのトラブルは発生します。裏切られたり、騙されたりするものです。
そんな時、どのように対処するでしょうか？
多くの人は、怒りを無理に押し殺してその場を収めるものと思います。
立派ではあるものの、怨みの気持ちは後まで尾を引くのではないでしょうか？
このような時、老子は徳を持って返すのが理想というのです。

たとえば、怨みを抱く人間を第３者からＡさんはどんな人ですか？と聞かれた時、「Ａさんは立派な人ですよ」と相手を褒めてやれ、と言うのです。
このような態度は、人の道、真理を理解しないと出来るものではないようです。
経営をする以上、多くの人が入社、退社を繰り返します。
この心得があるとストレスが少し解消するかもしれません。

7. 足るを知れば辱められず―止足（しそく）の戒（いまし）め―

地位と生命と、どちらが大切か？生命と財産と、どちらが重要か？得ると失うと、どちらが苦痛か？と考えてみましょう。
地位に執着しすぎれば、必ず生命を擦り減らすことになります。財産を蓄えすぎれば、必ず失う時が来ます。特に終日を迎える時の苦しみは悲惨です。
しかし、「足ることを心得ていれば、辱めを受けない。」「止まることを心得ていれば、危険はなく、いつも安らかに暮らすことが出来る。」ことになります。

◎「欲」は身の破滅を招く
この章は、「足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆うからず」の名言によって良く知られています。「足ること、止まることをよく心得てかかれ」と言うのです。これを特に「止足の戒め」と言います。
むろん、欲には良い面もあります。何らかの欲があるからこそ、やる気も出て来ます。
問題は過ぎることです。
たしかに欲の皮を突っ張ると、往々にして手痛いしっぺ返しを受け、身の破綻を招くことも少なくありません。後で「しまった」と思っても、時すでに遅しなのです。
『老子』のこの言葉は、それを警告したものです。

『菜根譚』の中から、これに関連した実践的なアドバイスを３つ程取り上げます。

●口あたりの良い珍味は、全て腸を痛め骨を腐らせる毒薬である。ほどほどにしないと、健康をそこなう。快適な楽しみは、いずれも身を滅ぼし徳を失う原因である。ほどほどにしないと、悔いを残す。
●前へ進む時には、必ず後に退くことを考えよ。そうすれば、垣根に角を突っ込んだ羊のように、身動きがとれなくなる恐れはない。手を着ける時には、まず手を引くことを考えよ。そうすれば、虎の背に乗った時のように、闇雲に突っ走る危険を避けることが出来る。
●財産が多くなるほど、失う時の損害も大きくなる。その点、貧乏人には失う心配がないので、金持ちよりもはるかにましだ。地位が高くなるほど、躓く機会も多くなる。その点、地位の低い者はいつも安泰だから、低いままでいた方が遥かに優っている。

『菜根譚』の言うように、ここまで割り切れるかどうかは別として、これらのコメントはいずれも『老子』の思想を踏まえたものであるようです。
これらの考えから「金持ちになるのは簡単だ」が生まれました。
今あるお金に満足すれば誰でも金持ちになれます。
今の売上に満足すれば、どんな会社も黒字決算を続けることが出来ます。
当然、将来の発展は約束されます。
この考え方を基本にすれば、会社経営は「夢に満ち溢れたもの」に近付くように思います。

8. 愛するに身を以って天下となせば、以って天下を寄すべきが如し

安心して天下を託せるのは、どんな人物でしょうか？老子は、なによりもまず自分の身を大切にする人物なのだと言います。
というと、意外に思われるかもしれません。しかし、自分の身を大切にする人物とは、どんな事態に追い込まれても、慎重に行動します。冒険をおかしたり、じたばた動きまわったりはしません。そんな人物こそ実は頼りがいがあるのだ、と老子は言うのです。
「詩経」という古典に、「戦々兢々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」という言葉があります。言うまでもなく、思慮深く、慎重な態度を形容したものですが、老子が頭に描いているのも、このようなタイプのようです。
この指摘は、おそらく天下の指導者だけではなく、どんな組織のリーダーにも当てはまります。リーダーは責任が重い。そういう重い責任を果たすためには、慎重な舵取りに徹しなければならない。軽挙妄動は許されないのです。

政治家などに、よく「体をはって」とか「命にかけて」といった言葉を、軽々しく口にする人がいますが、老子によれば、こういう人はそもそも政治家失格と言わざるを得ないのではないかと言っているようです。
会社経営においても同じく、自分の人生を大切にしてこそ、経営者としての人生も輝くのではないでしょうか？
「人間としての幸福と経営者としての幸福の調和」が大切と思います。

9. 人に智慧多くして、奇物滋（ますます）起こる

「国を治めるには正道を持ってし、戦いに勝つには奇道をもってする。しかし、天下を治めるには、無為に徹しなければならない」と言っています。
なぜ無為でなければならないのか？「禁令が増えれば増えるほど人民は貧しくなり、技術が進めば進むほど社会は乱れているではないか。人間の知恵が増えれば増えるほど不幸な事件が絶えず、法令が整えば整うほど犯罪者が増えているではないか。」と指摘しています。
「私が無為であれば、人民は自ずから教化される。私が清静を好めば、人民は自ずから正道に返る。私が作為を弄さなければ、人民は自ずから富む。私が無欲であれば、人民は自ずから本性に返る」と続いています。

◎「枝葉末節」にこだわると行き詰まる
「正を以って国を治む」の「正」とは、正攻法を意味しており、政治の場に当てはめると、徳をもって臨む統治法を指しています。これに対し、「奇を以って兵を用う」の「奇」とは、変化技や奇襲戦法の類を意味しています。「奇」をもって勝利を収めるとは、『孫子』以下の兵法書がひとしく力説しています。
つまり、政治における「正」、戦いにおける「奇」とは、いわば当時の常識であり、極めて基本的な対応でした。
これに対し、『老子』の言う「無為」は、「正」や「奇」のレベルを突き抜けていったところにあります。レベルが違うようです。

◎小田原・北条氏も末期の四代氏政の時代のこと
一人の老僧が城下にやってきて、辻に立てられている制札を見ながら、「ああ、お気の毒に。せっかくの北条氏もおしまいじゃわい」と呟いた。
報告を受けた奉行は、早速使いを出して老僧を招き、子細を糾した。
「なにゆえでござろう。制札の箇条がものの道理に反しているとでも」
「いや、いや。いずれももっともな箇条でござる」

「なれば、政道に誤りはないはず。いかなるわけで、北条氏もおしまいだと申されたのか」
老僧は居ずまいを正して答えた。
「さればでござる。愚僧は 30 年前にもご城下にまいり申したが、当時、制札の条文は、わずか五箇条でござった。それが今回来てみれば、30 箇条に余っており申す。それゆえ、失礼ながら北条氏も先が短いと申し上げましたのじゃ」
怪訝な顔をしている奉行に、老僧はさらにこう言ってダメを押したという。
「藩主に威光があり、士民一同喜んで服従している時は、法令の箇条にしても、少ない数でこと足りるものでござる。藩主が聡明でなく、威光も衰えるに及んで、士民の中にも不心得者が多く現われ、したがって法令の箇条も年毎に多くなり、複雑とあい成る道理。士民は複雑な法令など喜び申さぬ。士民の心が藩主から離れるは、これすなわち亡国の兆でござる。
制札の箇条がものの道理に反しておるかどうかなどは枝葉末節のこと。そんな小さなことではなく、われを戒め、自らを省みて、政治の根本をご洞察なさることが肝心でござろう」
ちなみに北条氏はこの氏政の子の代に豊臣秀吉によって滅び、五代、百年に渡った治世に終止符を打っています。

◎現代政治に通ずる老子の精神
老僧の指摘は、現代でも当てはまるようです。
国でも会社でも、あれをしてはならん、これをしてはならんと、規制やしばりを強化すると、下からの活力を殺してしまう。また、法を厳しくして締め付けをはかれば、抜け穴をくぐろうと立ち回る者が後を絶たなくなります。
これは、今も昔も変わりがありません。
ただし、国や政治の指導力は必要ないのかと言えば、そうではありません。肝心なところはしっかりと握り、押さえるところはしっかりと押さえなければなりません。そうでないと、いたずらに無用な混乱を増すばかりです。これが『老子』流の『無為』の政治に近付く道と思います。

10. これを望むに木鶏に似たり。その徳全(まった)し

ある主様に頼まれて一羽の強い闘鶏を育てることになったある男の話です。
訓練を始めて 10 日経った。主様から「もう他の鶏と蹴り合いをしても負けないか？」と聞いたところ、その男は「まだです、やみくもに殺気立ち虚勢を張っていてだめです」と答えました。

また 10 日経って主様が尋ねると「まだです。他の鶏を見ると飛びかかろうとするからだめです」と答えました。
さらに 10 日経って聞くと「もう良いでしょう。敵の鶏が挑みかかっても、少しも態度を変えません。少し離れてみるとまるで木彫りの鶏のようです。」
この話のように敵意が全くない人には闘争心は湧きません。
木鶏のような指導者になりたいもの。指導者の理想像です。

11. 軽諾は必ず信寡(しんすくな)し

「軽諾」とは、よく事情も考えないで、軽々しく「わかりました」とか「承知しました」などと言うこと。つまり、安請け合いです。「信」とは、ウソをつかない、約束したことは必ず守ることです。つまり、「安請け合いは不信の元」ということです。
安請け合いというのは、マイナスばかりで、良いことは一つもありません。
まず第一に、自分を苦しめます。普通の人間であれば、請け負ったからには何とか実現させようと努力します。しかし、往々にして無理な約束をしていることが多いので、せっかくの苦労も報われず、「なぜあんなことを請け合ったのだろう」と、後悔の想いだけが残ることになります。
第二に、請け合ったことをやり遂げないと、周りの信用まで失ってしまいます。
そうならないためには、発言はくれぐれも慎重にする必要があります。約束する場合でも、前後の事情や自分の力量を十分に検討してかからなければなりません。
経営計画書などで売上を下げる方針は、この教えによるものであり、無理が無いため、却って良い結果を生むことになります。

12. 知りて知らずとするは、尚(しょう)なり。知らずして知れりとするは、病(へい)なり。

「知っているのに知らないふりをする。これが最高のあり方だ。知りもしないのに知ったかぶりをする。これは重大な欠点だ」というのです。
孔子は、同じ「知る」ということについて、「これを知るをこれを知るとなし、知らざるを知らずとなす。これ知るなり」
と、『論語』の中で語っているように、こういう態度によって、自分を高めることが出来ると言っています。
これに対し、「知りて知らず」は、リーダーシップを取る時の心構えのようです。

「知りて知らず」は、部下に限らず、全ての交渉において役立つものと思います。
特に「君子は盛徳ありて容貌愚なるが如し」と言うように、表面だけで判断してはいけません。
“負けて退く人を弱しと思うなよ、知恵の力の強気ゆえなり”は高杉晋作の名言です。

13．上善は水の如し。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪(にく)む所に居(お)る。

「上善」とは、理想的な生き方です。なぜなら、水は万物に恩恵を与えながら、自分は相手に逆らわないで、人の嫌がる低い所に流れていくからです。
水には三つの特徴があります。
第一は、丸い器に入れると、丸い形になる。四角な器に入れると、四角な形になる。相手に逆らわないで、いかようにもこちらの形を変えていく柔軟性を持っている。
第二に、地球上の生物に大きな恩恵を与えておきながら、自分はというと、低い所、低い所へと流れていく。そのあり方たるや、極めて謙虚である。
第三に、それでいて急流ともなれば、固い岩石のようなものまで打ち砕いてしまう力を秘めている。
こういう三つの特徴を踏まえて、水のあり方に学べというのが「上善如水」です。むろん、「柔軟であれ、謙虚であれ」と言っても、自分の主体性はきちんと堅持しているのです。
それがなかったら、だたの軟体動物になってしまうかもしれません。

この水のように生きるために水五訓があります。

水五訓

一　自ら活動して他を働かしむるは水なり
二　常に自己の進路を求めてと止まざるは水なり
三　障害にあい、激しくその勢いを百倍しうるは水なり
四　自ら清くして他の汚れを洗い、清濁併せ容るるの量あるは水なり
五　洋々として大洋を満たし、発しては蒸気となり、雲となり雨となり雲と変じ露と化し、凝っては玲瓏なる鏡となり、しかもその性を失わざるは水なり

この教えから、私の「善意総和波動再建システム」が生まれました。

14. 生(しょう)じて有せず、長(ちょう)じて宰(さい)せず、これを玄徳(げんとく)と謂(い)う。

「玄徳」とは、「道」が備えている大いなる徳です。それは、「生むけれども所有せず、育てるけども支配しない」、そういう広大無辺なものなのだと言います。

では、「玄徳」とは具体的にどういうことなのでしょうか？

「しっかりと自分を見つめ、“無為”の道を守っているだろうか。
赤子のように、たくましく柔軟に生きているだろうか。
いささかの汚点もなく、心を洗い清めているだろうか。
人民を愛し、国を治めるにあたって、才知を振り回していないだろうか。
自然の移り変わりに対して、女性のように控えめな対応をしているだろうか。
素晴らしい知謀に恵まれながら、その知謀をひけらかしてはいないだろうか」

この呼びかけに対して、「イエス」と答えることが出来るようなら、それがすなわち「玄徳」のようです。つまりは、柔軟、無心、謙虚、控えめといったことです。これらの徳を身に付けるなら、どんな状況の下でも、しなやかに生きていくことが出来るのだというのです。

15. 善く道を為(おさ)むる者は、微妙玄達(びみょうげんたつ)、深くして志(し)るべからず。

「道」を体得した人物は、底知れぬ味わいがあって、その深さを測り知ることが出来ないのだといいます。

しかし、老子は、これではあまりにも素っ気ないと思ったのか、「あえて形容すれば、こうなるだろう」とことわって、その人物像を次のように描いています。

「氷の張った河を渡るように、慎重そのもの。
四方の敵に備えるように、用心深い。
客として招かれたように、端然としている。
氷が解けていくように、こだわりがない。
手を加えぬ原木のように、飾り気がない。
濁った水のように、包容力に富んでいる。
大自然の谷のように、広々としている」

「天衣無縫というべきか融通無碍というべきか、漠として捉えどころがない。それでいて、どこかに一本しぶとい芯が通っている。」そんな人物像が浮かんでくるようです。

16. 大道廃(すた)れて、焉(ここ)に仁義あり。智慧(ちえい)出でて焉に大偽(たいぎ)あり。

「大いなる“道”が見失われるようになると、やれ仁だ、やれ義だと、声高に叫ばれるようになる。小賢しい人間の知恵がのさばり出すと、大きな虚偽がはびこるようになる」というのです。この「大道廃れて仁義あり」も、『老子』の中では、広く知られている言葉の一つです。

老子は人間の作為や賢しらを否定して「無為自然」の「道」に返れと説きました。

その老子から見たら、仁義や知恵などというのは、「道」に反した賢しらに過ぎないようです。

たとえば、現代の日本では「生きがい論」が盛んであるが、老子に言わせれば、それは、生きがいの失われた無目的社会なればこその現象だということになります。また、道徳教育を強化せよ、といった声が聞かれるのも、決まって教育現場の荒廃が明るみに出た時です。

それもこれも、根本が見失われているからです。根本とは、「道」です。そこに返れと老子は言っています。

17. 学を絶てば、憂いなし。

知識に捉われなければ、悩みも生じない、というのです。これは老子一流の逆説ですが、一面の真実を鋭くついています。

たとえば、子供の世界です。40 年、50 年前、私たちが子供であった時代と比べて、今の子供たちの方がはるかに知識を詰め込んでいます。彼らの情報量は、おそらくかつての私たちの数十倍にも達しているかもしれません。では、彼らの方が幸せなのかと言えば、必ずしもそう言えないのではないでしょうか。なまじ知識を詰め込んでいるだけに、かえってそれに振り回されて、心のバランスを失っているように思われてなりません。

子供だけではなく、ビジネスマンの世界でも自己啓発のための勉強会が流行しています。たしかに、動きの激しい現代、のんべんだらりと日を送っていたのでは、時代に取り残されていくばかりかもしれません。自己啓発、大いに結構です。しかし、話を聞いてみると、それらの勉強会の多くは、どうでも良いような情報に振り回されている感がしないでもありません。それでは、せっかくの勉強会も、不安や迷いを深めるばかりです。

学んでほしいのは、原理原則です。これだけはしっかりと身に付けたいものです。その他のつまらない情報は、むしろ勇気を持って切り捨てるのが賢明な生き方ではないかと思います。

18. 唯(い)と呵(あ)と、その相去ること幾何(いくばく)ぞ。美と悪と、その相去ること何若(いかん)。

広大無辺な「道」に目覚めた人物から見ると、この世の中のあらゆる事物、あらゆる価値観は全て相対的なものに過ぎず、固執するに値しないものです。だから、老子は「“ハイ”と“ウン”とに、どれほどの違いがあるというのか。善と悪とに、どれほどの違いがあるというのか」

と、問いかけているのです。「唯」とは、丁寧な返事、「呵」とは、ぞんざいな返事です。老子の語る通り、少なくともそこに一面の真実があることを認めざるを得ません。

しかし、私たちの現実はどうか。残念ながら、つまらぬことに目くじらを立てて、ああでもない、こうでもない、と騒ぎまわっています。白だ、黒だ、勝った、負けた、と血まなこになっています。

出来れば、白だ、黒だと走り回っている自分の中に、それを客観的に見つめているもう一人の自分を持ちたいところです。そうすれば、老子の言うレベルに一歩近づくことが出来ると思います。

また、それだけゆとりのある生き方が出来るし、人間の器を一回り大きくすることが出来るかもしれません。

19. 天下の難(かた)きは易(やす)きより作(おこ)り、天下の大(だい)は細(さい)より作る。

「いかなる困難も容易なことから生じ、いかなる大事も些細なことから始まる」

つまり、大きな仕事を成し遂げるためには、些細なことだからと言って手を抜いてはならない。些細なことの積み重ねが、やがて大きな仕事に結びついていく、ということです。

逆に言うと、最初から一発勝負に出たり、一山当ててやろうと思っても、上手くいくはずがない。平凡な毎日の仕事を一歩一歩こなして行くことによって、展望が開けて来るということです。

日々の仕事を疎かにして成功はあり得ない、と言っています。

そして、「道を体得した経営者は、初めから大事を成し遂げようとはしない。だから、成し遂げることが出来る」と結論付けています。

20. 大国を治るは小鮮を煮(に)るが如し

「国を治めるのは小魚を煮るようなもの、やたら掻き回してはならない」と言うのです。

「小鮮」とは小魚のこと。小魚を煮る時、やたら突ついたり、掻き回したりすると、形も崩れるし、味も落ちてしまいます。そろりそろりと煮るのがコツなのだというのです。

会社経営も同じこと、細かな所まで干渉すれば、社員のやる気や活力、個性を殺してしまいかねません。

それだけならまだしも、反発さえ招きかねません。

それよりも、会社の経営理念、方針を確立し、業務マニュアルを作って社員一人一人のやりがいのある環境を作りさえすれば、上手くいくということです。

子供の育て方にも同じことが言えそうです。

細かいことにいちいち注意するよりも、考え方や目的などを示し、励ます方が、より良い結果を生むように思われます。

21. 君子は盛徳ありて容貌愚なるが如し

【無心であれ、素朴であれ】

「男の強さは認めつつも、あえて女の弱さに徹するならば、もろもろの流れを集める渓谷のように、万物を受け入れることが出来る。そうすれば、道を体得して、赤ん坊のような無心の状態にたち返ることが出来る。

潔白を良しとしながらも、あえて汚辱の中に身を置けば、もろもろの流れを集める谷川のように、万物を包容することが出来る。そうすれば、道と合致して、原木そのままの素朴な状態にたち返ることが出来る。

素晴らしい明知に恵まれながらも、あえて暗愚に徹すれば、天下の師表となることが出来る。そうすれば、道と一体となり、限りなく原初の状態にたち返ることが出来る。

原木は細工を加えられることによって製品となる。しかし、道を体得した人物は、原木の素朴さを保持することによって万物の主宰者となる。素晴らしい製品とは、もともと細工など加えないものである。」

例えば、女性の体現している柔弱、赤ん坊の持っている無心、渓谷が象徴している包容力、原木が持っている素朴さなど、これらの徳も『老子』は称えてやみません。

ただし、無心と言ってもまっさらな無心ではなく、その中に熟慮とか権謀を包み込んでいるのです。つまり、熟慮とか権謀を突き抜けて、その果てに到達した無心と言え

そうです。素朴さにしても同じ、表も裏も素朴なのではなく、練りに練りあげて、熟練の果てに到達した素朴さです。『老子』の意図したのは、そういう無心であり、そういう素朴さのようです。

　そのことは、「素晴らしい明知に恵まれながらも、あえて暗愚に徹すれば、天下の師表となることが出来る」という一節に、よりはっきりと示されています。暗愚と言っても、ただの暗愚ではなく、その中に素晴らしい明知を包み込んでいるのです。ただし、そんなことはおくびにも出さず、暗愚を装っているということのようです。

22. 無があるから有がある

【有の以って利をなすは、無の以って用をなせばなり】

　有が成り立つには、無の存在があると言ってます。

　例えば、10 ㎝幅の平均台を歩けと言われて歩ける人はいないと思います。

　体操の選手は平気で宙返りをしていますが、我々、一般人は不可能です。歩くことも出来ません。

　しかし、地面に置いてあればどうでしょうか？

　誰でもスイスイ歩けるはずです。

　この地面は無くても構わないものです。

　しかし、無ければ歩けません。これを無用の用と言います。

　これを例えて考えてみましょう。

〇子供の勉強の優劣

　子供には、勉強の出来る子を褒める習慣になっています。

　しかし、「出来ない子がいるから、結果として、出来ているに過ぎません。出来ない子に感謝しましょう」と教えたらいかがでしょうか？

「いじめ」が減ると思います。

〇会社でも同じです。

　出来ない社員がいるから出来ているだけと考えれば、調和が取れると思います。

〇同業者でも悪い商品やサービスがあるから、自社のものが売れると思えば、同業者に感謝心が生まれると思います。

23. 伸びるためにはまず屈する

【曲なれば則ち全し。枉なれば則ち正し】

「曲がっているからこそ、生命を全うすることが出来る。屈しているからこそ、伸びることが出来る」。これを「曲なれば則ち全し」、略して「曲全」と言います。

曲がっている状態とか屈している状態というのは、誰でも嫌うところです。しかし、伸びきった状態は、意外な脆さをはらんでいます。「曲全」には、もっと積極的なメリットもあります。

「自分を良しとしないから、かえって人から認められる。自分を誇示しないから、かえって人から立てられる。自分の功績を誇らないから、かえって人から讃えられる。自分の才能を鼻にかけないから、かえって人から尊ばれる。だから、争いをしかける者がいないのである」ということです。

会社の再建に際しても、まずは売上を下げ、無駄を無くして少ない売上でも成り立つようにするだけで、自然に回復、売上は伸びるものです。これをＶ字回復と言います。

屈することをしないでは、伸びることは絶対にあり得ないということです。

24. 寡黙こそ美徳である

【希言は自然なり】

「希言」とは、おしゃべりでないこと、つまり、寡黙という意味です。弁解も宣伝もしない、そういう寡黙さこそ自然のありようであって、無為自然の「道」にも合致しています。

これもまた饒舌の害を戒めた言葉ですが、老子は自然を引き合いに出して、ダメ押しをしています。

「疾風といえども半日も吹き荒れることはないし、豪雨といえども一日中降り続くことはない。誰がそれを司っているのかと言えば、天地である。その天地でさえ、不自然を長続きさせることは出来ないのだ。まして、人間の賢しらなど長続きするわけがないではないか」

たしかに、わざとらしさは長続きしない。必ずどこかでボロが出ます。

人を説得する場合でも、言葉を尽くして説明し、何とか相手に納得してもらうことは立派な説得です。しかし、それよりもはるかにまさっているのが、無言の説得です。あ

えて言葉を使わなくても、自ずから相手に納得してもらえる。そのためには、それなりの「品性」や「徳」が備わっていなければならないことは、言うまでもありません。

25. 功績を鼻にかければ嫌われる

【跂(つまだ)つ者は立たず。自ら矜(ほこ)る者は長からず。】

「背伸びして爪先で立とうとすれば、かえって足もとが定まらない。自分の功績を鼻にかければ、かえって足を引っ張られる」と言うのです。

会社の中を例に取ってみましょう。

若手社員の中には仕事が出来る社員が必ずいます。

しかし、周りに決められても必ず出世していくとは限りません。

なぜでしょうか？仕事が出来る人ほど人を見下げたりするものです。そのため、反発を買って行き詰まることが多いものです。

これは、仕事の出来る人にありがちです。

「仕事の出来る人より、出来た人」になりたいものです。

むろん、人間であるからには自信やプライドは必要です。しかし、それはあくまでも心の中に秘めておきたいものです。頑張るにしても、「跂つ」ような無理は避けて、さりげなく、自然に頑張りたい。老子によれば、それが長続きする所以なのだというのです。

26. 軽挙妄動を戒めよ

【軽ければ則ち本(もと)を失い、躁(さわが)しければ則ち君を失う。】

これは、トップやリーダーのあり方について語った言葉です。「軽々しく振る舞えば、組織を破綻させ、やたらに動けば、地位まで失ってしまう」のだと言うのです。

トップやリーダーは、組織の末端まで細かく気を配りながら、そんな素振りはいささかも表に出さず、黙っているのが理想的なあり方だ。留守にして、じたばた動き回っていたのでは、組織に対する押さえが効かなくなり、いつも自分の地位を維持することすら難しくなるかもしれません。

むろん、トップやリーダーは、時には、自ら率先垂範で事に対処しなければならないこともあります。ですが、そんな時でも、「ゆったりと構えて心を動かすな」と、老子は警告しています。常に冷静な態度で、全局の動きをにらんでいなければなりません。軽はずみな行動をしたのでは、たちまち部下の信頼を失ってしまいます。

27. 天下は取ろうとしても取れない

【まさに天下を取らんと欲してこれを為すは、吾、その得ざるを見るのみ。】

天下を取ろうとして策を弄する者に天下の取れた試しはないのだというのです。

さらに老子は、次のように付け加えています。

「天下とは不思議なもので、取ろうとしても取れるものではないのだ。取ろうとすれば、バラバラに崩れ、握ろうとすれば、逃げ去ってしまう。」

老子は「無為自然」を主張し、ありのままの素朴さを良しとします。したがって、人間の賢しらや作為を嫌います。そこから、このような主張が生まれてくるのです。

会社で例えると、売上を増やそうとしても、簡単に出来るものではありません。

何故ならば、売上を増やしてくれるのは、お客様の心だからです。

お客様に「仕える事」、つまり、心からの仕事をする事により、お客様からお客様へと伝わり、自然に増えていくものです。

これを情報（情けに報いる心）ネットワークを作ると言います。

28. 強い者は強さを誇示しない

【善くする者は果たして已(や)む。以って強(きょう)を取ることなし。】

真の戦上手は、目的を達したらさっさと矛を収め、むやみに強がることはしないものです。

老子は、さらにこうダメを押しています。

「勝っても、有頂天になることはないし、才能や功績を誇ることもない。戦いとは、相手から仕掛けられて止むを得ずするものだと心得ているので、仮に勝ったとしても武力を誇示しないのだ」

『孫子』をはじめとする中国の兵法書は、いずれも戦いはやむなくするものであって、「戦わずして勝つ」ことが理想の勝ち方だと認識しています。それに老子は作為を嫌い、自然のままを良しとします。そういう老子から見たら、戦争こそ最大の作為であり、最大の不自然であったようです。老子はこうも語っています。

「強いものは必ず衰える。なぜなら自然に反しているからだ。自然に反したものは長続きしない。」

これは、そのまま私たちの生き方に当てはまると思います。

29. 戦いはやむなく行なうもの

【兵(へい)は不詳の器(うつわ)なり。物或(ある)いはこれを悪(にく)む。故に有道の者は居(お)らず。】

「兵は不詳の器なり」という言葉も、広く知られています。

「戦いは、誰もが忌み嫌う。だから、“道”を体得した聖人は戦いを好まない」

いつの時代でも、戦争の被害は社会的弱者に集中します。老子は彼らになり代わって、戦争の愚かさに警告を発しているのです。彼は、こうも語っています。

「兵は不詳の器なり。已(や)むを得ずしてこれを用う。恬淡(てんたん)を上(じょう)となし、美とすることなかれ。若しこれを美とせば、これ人を殺すころを楽しむなり。それ人を殺すを楽しめば、以って志を天下に得べからず」

戦争は縁起が悪く、君子の好むものではない。やむなく行なう時は、あくまでも無欲に徹し、勝っても讃美しない。戦争を讃美するのは、人殺しと同じである。これでは、天下に志を得ることは出来ない、というのです。

30.自分を知る者こそ明智の人

【人を知る者は智なり。自ら知る者は明なり。】

訳せば、「人を知る者はせいぜい智者のレベルに過ぎない。自分を知る者こそ明知の人である」となります。「智」も「明」も同じような意味で、深い読みの出来る能力を指しています。しかし、二つを比べた場合、「智」よりも「明」の方が、一段と深い能力です。なぜなら、人を知るよりも自分を知る方が、はるかに難しいからです。

私たちはよく、自分のことは棚に上げて、人のことをああでもない、こうでもないとあげつらいます。人の欠点はよく見えますが、その割に自分の欠点は、見えないのです。それだけに自分を知ることは難しいということです。『孫子』の兵法に、「彼を知り、己(おのれ)を知れば、百戦殆(あや)うからず」とあります。「戦いに勝つためには、敵を知るだけではまだ不十分で、さらに自分を知らなければならない。」これは、戦いだけではなく、人生の厳しい局面を切り抜けていくためにも、全く同じことが言えます。

そのためには、「智」はもとよりのこと、出来れば「明」を身に付けておく必要があります。